

都市男性高齢者の社会関係

—— 社会関係の構造と親密さの関連要因 ——

古谷野 亘, 西村 昌記, 安藤 孝敏, 浅川 達人

第 43 回日本老年社会科学大会一般報告（老年 5 学会合同ポスターセッション），2001.6.

【目的】 社会的に孤立しがちであるといわれる都市の男性高齢者の社会関係を取りあげ、その構造と、親密さに関連する要因について検討した。

【方法】 調査は、1998 年 1～2 月に、東京都杉並区に居住する 60～79 歳の男性高齢者 1,500 人を対象として、訪問面接法により実施され、766 人から回答を得た（回収率 51.1%）。家族等による代理回答は求めなかった。

回答者の年齢は 60～79 歳、平均 69.8 歳であり、88.4%が有配偶であった。調査対象者には、同居家族と別居子以外で「おつきあいのある方」を最大 15 人まであげてを求め、その一人一人について、基本属性と交流の態様をたずねた。この手続きにより、766 人の回答者から、3,590 人の他者に関する情報を得た。

分析は他者との関係の対（tie）を単位として行った。最初に関係の態様に関する 6 個の指標について因子分析を行い、次いで抽出された因子の因子得点を従属変数とする多重分類分析を行った。

【結果】 一人の回答者があげた他者の数は 0～15 人、平均 4.76 人であった。他者の 87.4%は男性であり、年齢的には 60

歳代が 40.3%、70 歳代が 28.9%を占めた。知り合ったきっかけは、「職場・仕事を通じて」（39.8%）と「同じ学校」（20.5%）が多かった。他者の 83.4%とは「共通の話題」があり、67.7%は「共通の体験について話せる」人であった。また、他者の 74.7%は「気心の知れた仲」であり、61.9%は「一緒にいてほっとする」人であった。しかし、「家族ぐるみの付き合い」をしている人は 38.3%、「ちょっとした用事をしてくれた」人は 18.9%のみであった。

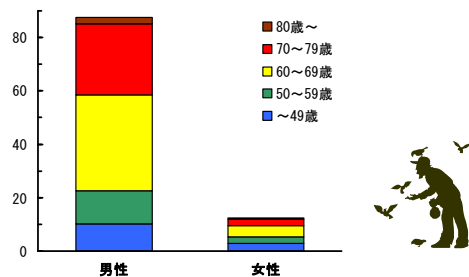
因子分析の結果は表の通りであって、第Ⅰ因子は他者との情緒的な親しさの因子、第Ⅱ因子は手段的サポートの因子であった。いずれの因子得点についても、知り合ったきっかけが大きな影響を及ぼしており、第Ⅰ因子では「同じ学校」の友人、第Ⅱ因子では兄弟姉妹・親戚の得点が高かった。いずれの因子についても、知り合った後の関係の重複が多い他者ほど得点が高かった。また、第Ⅰ因子には学歴と生活機能が正、年齢と子どもの数が負の影響を及ぼし、第Ⅱ因子には生活機能が正、年齢と学歴が負の影響を及ぼしていた。

【考察】 都市の男性高齢者の社会関係には、情緒的な親しさと手段的サポートという 2 つの相対的に独立な次元が存在し、他者の選択機序は次元により異なっている。また、他者との親密な関係の成立には、知り合ったきっかけと、その後の関係の重複が重要と考えられる。

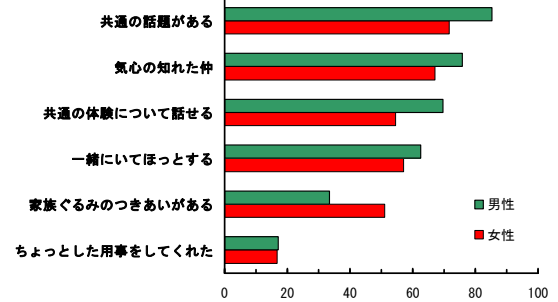
他者との関係の構造（斜交回転後の因子負荷量）

| | I | II | h^2 |
|----------------|-------|-------|-------|
| 共通の話題がある | .792 | -.199 | .587 |
| 気心の知れた仲 | .780 | -.024 | .587 |
| 共通の体験について話せる | .693 | .159 | .551 |
| 一緒にいてほっとする | .681 | .141 | .522 |
| 家族ぐるみのつきあい | -.073 | .838 | .683 |
| ちょっとした用事をしてくれた | .097 | .643 | .449 |

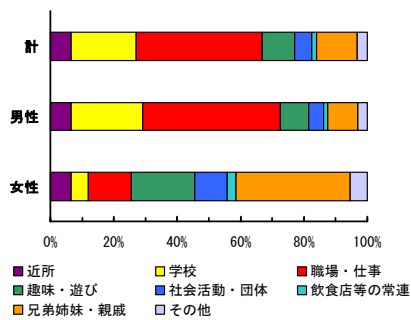
他者の性・年齢構成



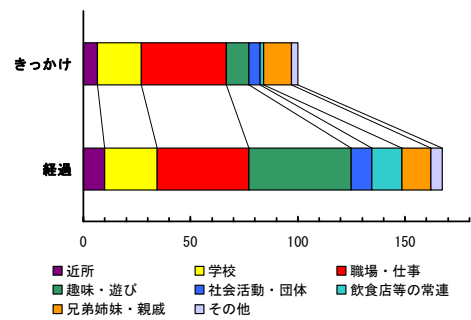
関係の記述



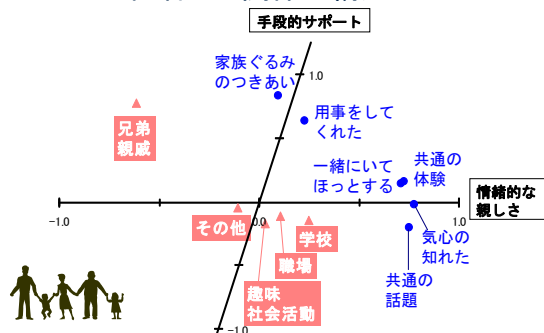
知り合ったきっかけ



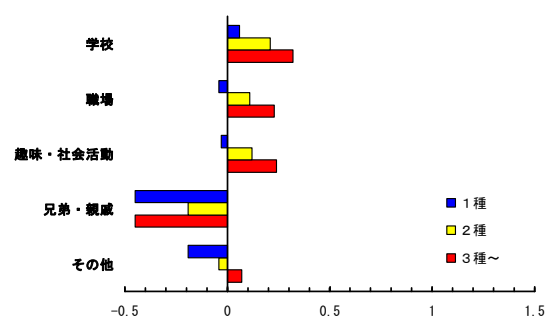
知り合ったきっかけ／その後の展開



他者との関係の構造



縁の重なりと関係のあり方 (情緒的な親しさ)



縁の重なりと関係のあり方 (手段的サポート)

